

初回授業2部制導入の失敗

小林 勝 法

A Failure in Enforcing Double Class Orientation System

Katsunori KOBAYASHI

Abstract

Students make use of syllabuses when choosing courses to take. And they also attach importance to attend class actually. 49.4% of students answered the contents and management of actual class were different from syllabuses. 54.7% of students answered they had experiences to quit registering after attending the first class.

Therefore we (The Faculty of International Studies, Bunkyo University) tried to enforce Double Class Orientation System. Teachers make a half lecture twice in one period. This system enables students to take two class orientations in one period and then to choose courses more satisfactory.

As a result, students using this system at each class are about 20% on the average. On the other hand, about 20% of students at each class were absent from first class. They didn't make use of chance to take two class orientations. Most of teachers complained of troublesome and wasting time. So we decided to quit this system.

In order to make this system useful, it is necessary to make students and teachers known thoroughly on this system and to make students recognize the importance of choosing classes and attending the first classes.

学生が履修科目を選択する上で、シラバス(以下、授業概要と表す)も役に立っているが、実際に授業を受けてみることも学生は重視している。そこで、文教大学国際学部では、初回(第一週)の授業時間を2分割し授業の概要説明を2回繰り返すことにした。学生は、同一時限に2つの授業概要説明を受けることができ、より満足した履修科目選択ができると期待してのことである。

1998年度は導入初年度ということもあって、学生と教員ともども混乱し失敗に終わった。'99年度は実施の周知徹底を図ったり、実施方法の改善も試みたが、学生はこの制度をうまく利用したとは言えず、教員側からは不評であった。結局、'99年度後期からは中止することにした。

初回授業2部制がどのようにして失敗したのか、学生と教員の意識と実態調査をもとに報告する。考察のもととするアンケート調査は全部で5つあり、その概要は本論文の最後に注としてまとめておく。そして、引用する際は、5つの調査を、学生'98、学生'99、教員'98、教員'99、初回授業'99として略記する。

I 「学生との懇談会」での要望

文教大学国際学部では、学部教育に対する意見や要望を学生から直接に聞き、学生と教員間の意志疎通を深める機会として、「国際学部の教育を考える学生と教員との懇談会」を年に2回開催している。'98年1月に開催したときに、学生から「履修登録前にもっと多くの授業を実際に受けてみたい」「授業時間を2分割して1コマに2つの授業を受けられるようにしてほしい」との強い要望が出された。

学期当初は履修する科目の選択をし、授業に対する期待が高まるのであろうか、学生の学習意欲が高まる時期である¹⁾²⁾。しかし、もし、履修選択に失敗するとその科目については半年や一年を満足しないまま過ごすことになる。実際に授業に2、3回出席しただけで受講放棄する学生もいる。これまで、文教大学国際学部では、授業概要集を配布したり、履修登録期間を遅く設定し一回は授業に出席してから登録できるようにするなどの配慮をしてきたが、それでもまだ不十分であるとの意見が学生の中には強くあった。「シラバスよりも顔見せを」という要望である。

II 初回授業から学生が得ている情報

学生が履修計画を立てる際の参考に供しようと文教大学でも授業概要集を配布している。実際に学生は履修計画の参考情報として授業概要を第1にあげ、80%以上の学生が利用している(表1参照)。そして、80%以上の学生が授業を受ける前に授業概要を読んでいる(表2参照)。

表1 履修計画の参考情報

	1年生	2年生	3年生
授業概要	83.0%	91.6%	84.7%
履修の手引き	60.0%	58.9%	67.5%
初回授業	55.8%	54.0%	55.4%
先輩友人	48.5%	44.1%	51.0%
その他	0.6%	3.0%	3.2%

(注)5つの選択肢から3つまでを選択させた。 調査：学生'99より

表2 授業を受ける前に授業概要を読むか

	1年生	2年生	3年生	全体
ほとんど事前に読んでおく	27.9%	33.8%	33.3%	31.8%
だいたい読む	57.0%	55.9%	54.5%	55.8%
あまり読まない	12.7%	6.9%	9.0%	9.3%
ほとんど読まない	2.4%	3.4%	3.2%	3.0%

調査：学生'99より

しかし、「実際の授業が授業概要に書いてあることと食い違ったことがある」と49.4%の学生が回答している。そして、その食い違った点は、表3に示したように授業内容や授業の進め方などであった。文教大学では、後期に開講する科目の授業概要も前年度の1月に原稿を提出しなければならず、半年以上も前に提出した授業概要通りに授業を行うのは教員にとってかなり苦痛である。学生に理由を説明し良心的に授業内容と計画を変更することは割に行われているのかもしれない。

表3 実際の授業が授業概要と食い違った経験と内容

	1年生	2年生	3年生	全体
食い違った経験がある	35.3%	61.3%	54.8%	49.4%
その具体的内容(あてはまるものすべてを回答、母数は全体)				
授業内容が異なった	18.0%	33.1%	30.6%	27.5%
授業の進め方(テキスト利用や討論等)が異なった	18.6%	7.0%	29.8%	26.8%
成績のつけ方が異なった	6.6%	6.3%	8.9%	7.2%

調査：初回授業'99より

そうとはいえ、このような割合で授業概要と実際の授業が異なるのであれば、「実際に受けてみたい」という学生の希望は無視できないであろう。表1に示すように、初回授業は履修選択の重要な判断材料となっているわけである。

そして、初回授業に出席して受講を取りやめたことのある学生は、54.7%である(表4参照)。すなわち、授業を始める前に履修登録をする制度を取っていたとすると何人かの学生は授業を受けたとたんに履修選択に失敗したと思うことであろう。

表4 初回授業に出て受講をやめたことがあるか

	1年生	2年生	3年生	全体
やめたことがある	52.1%	50.0%	67.5%	54.7%
その具体的内容(あてはまるものすべてを回答、母数は全体)				
授業概要からイメージしたものと異なったため	26.3%	26.1%	29.8%	27.3%
教員の人柄を見て、思うところがあって	21.0%	23.2%	35.5%	25.9%
授業概要を読まず、科目名だけで選んだため	10.2%	7.7%	14.5%	10.6%
受講者数が多すぎたため	4.8%	7.7%	8.9%	6.9%
受講者数が少なすぎたため	0.6%	0.7%	4.8%	1.8%

調査：初回授業'99より

受講をやめた理由は、「授業概要からイメージしたものと異なったため」が高く、27.3%である。限られた紙幅の授業概要にわかりやすく記載することは難しいことであるし、その学問領域をよく知らないものには、授業概要から正確にイメージすることも難しいことであろう。それ故、イメージと実際が異なるのはある程度はやむを得ないことである。それだからこそ一層実際の授業を受けて判断する必要があるだろう。

次に「教員の人柄を見て思うところがある」を理由とした割合も25.9%と高い。これこそ、実際に授業を受けてみないとわからない情報である。「思うところ」が何であるか気になるところだが、調査では敢えて聞いていない。以心伝心である。

そして、初回授業から得られる情報は、授業概要と教員紹介誌のいずれよりも多いと学生は考えている。表5に示すように、初回授業からの方がより多く得られると考えられている情報は、授業の「内容」と「進め方」「成績のつけ方」「単位や良い成績を取ることの難しさ」「教員の人柄」などである。唯一「教員の専門領域や学識の深さ」については、教員紹介誌の方が高い。

表5 授業概要、初回授業、教員紹介誌から得ている情報の程度
3件法で「十分得ている」と回答したものの割合

	授業概要	初回授業	教員紹介誌
授業の内容	39.5%	47.1%	12.7%
授業の進め方	29.1%	52.1%	11.4%
成績のつけ方	28.9%	42.0%	12.1%
単位や良い成績を取ることの難しさ	15.8%	24.8%	11.5%
教員の人柄	13.1%	41.5%	27.3%
教員の専門領域や学識の深さ	14.9%	19.0%	30.5%

(注)母数は全学年。

調査：初回授業'99より

何か商品を購入するときに、カタログだけを見て選ぶよりも商品を手にとって見てから購入するかどうかを決めたいと思うだろう。それと同じように、授業概要だけではなく、実際に授業を受けて見てから履修科目を決めたいと思うのはごく当然のことである。

Ⅲ 初回授業2部制のねらいと実施方法

1 ねらい

前述したように、「授業時間を2分割して1コマに2つの授業を受けられるようにしてほしい」との強い要望が学生から出された。最初の授業は概要説明だけにして、履修選択の判断材料にさせてほしいというのである。

一方、教員としても初回授業はやりにくいし非効率的であるという問題がある。つまり、初回授業は受講生が確定していないので本格的には授業を開始しにくい。そのためか、授業の概要説

明をするだけで、短時間で授業を切り上げる教員を散見する。2週目には、1週目に出ていない学生もいるので概要説明を再度繰り返す必要もあり、まったく非効率的である。

そこで、初回授業2部制を導入することで、「実際に受けてみたい」という学生の要望に応えらるとともに、教員の不満も解消すると期待した。

2 実施方法

初回授業は授業の概要説明のみとし、90分の授業時間を半分に分けて、40分授業を2回行うことにした(図1参照)。これにより、学生は同一時に2つの授業の概要説明を受けることができ、より満足のいく履修選択が可能になる。なお、受講クラスが指定されている必修の授業は、初回授業2部制をする意味がないので実施せず、それ以外の選択科目についてのみ実施した。

図1 初回授業の時間配分

1回目の授業説明 (40分ほど)	休憩 (10分ほど)	2回目の授業説明 (40分ほど)
履修希望学生受講	学生は教室移動	履修希望学生受講

実施の連絡は、導入初年の1998年は、3月初旬に教員には文書で依頼し、学生にはポスターを掲示して知らせた。4月に入ってから、教務オリエンテーションで説明したほかに、必修の授業でのアナウンスとアドバイザー(クラス担任)を通じて学生に周知徹底するよう努めた。

導入2年目の'99年度は、さらに、2部制を実施していることを伝える張り紙を用意し、教員に教室のドアに掲示してもらうことにした。実施することを教員に表明してもらうのと、学生の遅刻者を水際で防ぐ一石二鳥をねらった作戦であった。それは、以下のような文面である。

この授業は、初回授業2部制で行っています。入れ替えの時以外の入退室はできません。

4月 日() 限 授業名 担当教員氏名

1回目 時 分 ～ 時 分

(入れ替え)

2回目 時 分 ～ 時 分

国際学部では、以下の対象外科目を除き、4月13日～19日、初回授業2部制を行い、出席調査をしています。(対象外科目：語学、体育、コンピュータ、学部必修などの必修科目と共通教養科目)

入れ替えの時には、他の授業の迷惑にならないよう静かにしてください。

IV 実施結果と学生の希望、教員の意見

1 実施結果

1) 認知度

実施していることをどのくらいの学生が知っていたのであろうか。アンケートの結果では、初年度('98年度)では全体の75.9%が「知っていた」と回答している。次年度では、2、3年生の認知度が上がり、全体で80.6%となった(表6参照)。実施2年目であるから、2、3年生の認知度が上がるのは当然であるが、それでも90%以下である。一方、1年生が飛び抜けて悪くなっている。これは、この学年からカリキュラムが変更になり、次の3点で2年生以上と異なるため、初回授業2部制を実施している授業をほとんど受けないからだと思われる。その変更点とは、①通年制からセメスター制になったこと、②履修登録できる単位数の上限が年間50単位から半期22単位になったこと、③第1セメスターは特に必修科目の比率が10科目中6科目と高くなったこと、である。

表6 初回授業2部制の認知度

	'98		'99	
	知っていた	知らない	知っていた	知らない
1年生	84.2%	15.8%	67.9%	32.1%
2年生	70.4%	29.6%	85.4%	14.6%
3年生	75.6%	24.4%	87.4%	12.6%
全体	75.9%	24.1%	80.6%	19.4%

調査：学生'98、学生'99より

初回授業2部制の実施を何を通じて知ったのか、その情報源を尋ねた結果を表7に示した。学年によって、情報源とする比率が異なる。教務オリエンテーションは学年が低い方が高く、その他は学年が高い方が高い傾向にある。これは学年毎に情報環境が異なるからであろう。授業の教員やドアの張り紙が1年で低いのは、前述したとおり必修科目の比率が高く、2部制を実施している授業を取る機会が少ないからであろう。

表7 初回授業2部制実施の情報源

	'98				'99			
	1年	2年	3年	全体	1年	2年	3年	全体
掲示	18.4%	31.9%	40.0%	30.7%	----	(調査せず)		----
教務オリエンテーション	60.5%	1.9%	4.4%	17.4%	92.2%	25.8%	17.4%	44.4%
アドバイザー	13.2%	0.0%	0.0%	3.4%	0.6%	0.0%	0.0%	0.2%
授業の教員	13.2%	33.3%	35.6%	28.5%	3.6%	32.3%	38.9%	25.2%
友人・先輩	23.7%	24.1%	33.3%	27.0%	10.4%	25.8%	35.4%	23.8%
ドアの張り紙	----	(調査せず)		----	1.3%	17.7%	15.3%	11.8%

(注)あてはまるものすべてを回答。

調査：学生'98、学生'99より

以上のことから、次の4点がわかった。

- ①周知徹底するまで時間がかかるので、新しい制度を導入する場合には1年で判断するのではなく、ある程度は継続してから判断する必要がある。
- ②学生に100%の周知を望むのは不可能である。特に、大学に不慣れな新生には難しい。しかし、 Semester制の場合には、履修登録の機会が年に2回に増え、初回授業2部制を知る機会が増えるので、認知度は高まると期待できる。
- ③周知徹底には学年に応じて、教務オリエンテーションや掲示、ドアの張り紙など様々な機会を利用して行うと良い。
- ④必修科目の比率が高く選択の幅が狭いカリキュラムの場合には、この制度はあまり意味がない。

2) 利用コマ数

次に、利用実態を学生と教員の双方から見てみよう。

まず、この初回授業2部制を実際に利用したと回答した学生の割合は、57.9%である。過半数が何らかの形でこの制度を利用したと回答している。そして、利用したコマ数は2コマ弱である(表8)。2、3年生の場合は通常10数科目を履修登録するので、履修科目の全体の10%強に相当することになる。

表8 実際に本制度を利用した割合とコマ数の平均

	1年生	2年生	3年生	全体
1コマ以上と回答したものの割合	60.0%	53.3%	63.5%	57.9%
平均利用コマ数	1.5	1.7	2.0	1.7

(注)同一時限に2つの授業に出席した場合を1コマと計算。調査：学生'99より

この10%強の科目のために初回授業2部制を実施する必要があるのか、得失を考量しなければならないが、ある学生に聞いてみたところ、「たまたまどちらかを取ろうかと迷うコマがなかった」という答えが返ってきた。おもてに表れた数字だけで判断するのは難しい。

一方、教員対象のアンケート結果からは個々の授業において受講希望者の約20%がこの制度を利用したと推察できる。この数値の算出は、初回授業2部制の1回目に出席した人数に対する2回目の出席人数の割合として求めた。表9は、回答が得られた74の授業(調査対象授業の58%に相当する)を開講時限毎に分け、集計したものである。月曜日から金曜日までの授業数と出席者数を集計した結果である。第2週目の欄は、初回授業を欠席して第2週目に初めて出席した学生の数である。

これを見みると、I限の利用率が圧倒的に多く、V限の利用率はそれとは逆に少ないことがわかる。このことから、I限の2回目の出席者は寝坊などの理由で単に授業に遅刻しただけかも知れない。その可能性は高いと思われるので、利用率を20%よりも低めに評価した方が妥当だと思われる。

学生へのアンケートでは、「1つの時限に2つの授業に出席した場合」だけを答えるよう

表9 初回授業2部制の利用者数

時限	授業数	1回目	2回目	割合	第2週目	割合
I	19	745	261	35.0%	183	24.6%
II	17	540	99	18.3%	146	27.0%
III	18	451	83	18.4%	88	19.5%
IV	12	366	75	20.5%	65	17.8%
V	8	214	6	2.8%	43	20.1%
計	74	2316	524	22.6%	525	22.7%

(注)割合の分母はいずれも1回目の人数。 調査：教員'99より

指示したが、学生の回答には、1回目だけ、あるいは2回目だけに出席した場合も含まれているかも知れない。前述した学生の利用率の57.9%も低く評価した方がよいかも知れない。

2 学生の希望

初回授業2部制についての学生の意見を表10に示した。まず、「来年度も実施することを希望する」学生がきわめて多く、90%を超えている。次いで、「授業を受けてから履修科目を決められる」(82.8%)、「履修したい科目が重なったとき選びやすい」(76.3%)である。当然のことながら、学生は肯定的に受け止めているし、多くの学生が継続を希望している。

「時間通りに終わらなかった」(16.2%)や「実施している科目がわかりにくかった」(13.2%)などの回答があることから、この制度の実施上の改善点が示唆されている。すなわち、実施については、まず教員に徹底させる必要がある。ある学生は、「2回目に他の授業に出席したかった

表10 初回授業2部制に対する意見

	'98	'99
来年度も実施することを希望する	93.2%	96.4%
授業を受けてから履修科目を決められる	75.7%	82.8%
履修したい科目が重なったとき選びやすい	79.3%	76.3%
授業概要よりもより詳しくわかる	45.0%	46.7%
時間通りに終わらなかった	14.4%	16.2%
実施している科目がわかりにくかった	17.1%	13.2%
全体の授業時間が減る	10.8%	3.6%

(注)あてはまるものすべてを回答。 調査：学生'98、'99より

が、1回目の教員が時間通りに終わらなかったので2回目に出席できなかった」と回答している。また、実施している科目を時間割上に表示するなどして、学生がわかりやすい工夫を講ずると良いだろう。

3 教員の意見

教員対象アンケート'98からは、「同じことを繰り返すので教員の負担が大きい」とか「学生への周知が不十分である」「学生へのサービスとしてこの制度は評価できる」などの意見が得られた。そこで、この制度の趣旨にさらに理解を求め、学生への周知を徹底させて、'99年度の実施に踏み切った。

教員対象アンケート'99からは、「学生にとっては良い制度だと思う」というようなこの制度に肯定的な意見も見られたが、'98年度と同様の意見の他、「2回目の出席者が極端に少ない」「授業回数が1回少なくなる」「第2週目から出席する学生数が依然として多い」なども寄せられた。そして、実態を調べてみると、前述したように1回目の受講人数に対し約20%の学生が第2週目に初めて出席している(表9参照)。これらの学生に対し、再度授業の概要について説明をしなければならず、この手間を省こうとしたもくろみは見事にはずれてしまったのである。何のためにやっているのかわからないというのが大方の教員の感想であった。

V おわりに

初回授業2部制を生かすも殺すも学生次第である。新入生の中には、履修科目を決めるまで授業に出ないものだと勘違いしているものもいるし、上級生の中には、初回授業は休むと決めているものもいる。このような雰囲気は、出席調査をしなかったり、初回に欠席してもなんら支障なく受講できたり、初回授業を早々に切り上げてしまう授業がなくなる限り、変わらないであろう。新しい制度を導入するに際しては、実施面では勿論、意識の面でも教員側の足並みをそろえないと実効が上がらないことを痛感した。

文教大学国際学部ではこの試みは失敗に終わったが、履修選択と初回授業が重要であることは毫も変わらないので、学生と教員の意識改革を気長に進めていく必要があると考える。

カリキュラム改正により、履修登録単位数の上限が従来より低く設定され、いわゆる保険をかけておくような登録ができなくなったので、履修選択に一層真剣にならざるを得なくなった。授業概要を事前に良く読んだり、初回授業の出席率も高まると期待できよう。

(付記)この研究は、文教大学国際学部共同研究費(1999年度)の助成を得て行った「大学導入期教育の充実に関する研究」の成果の一部である。

注 5つの調査の概要を以下に示す。

学生'98	調査名	初回授業2部制についてのアンケート			
	調査対象	文教大学国際学部1～3年生		合計906人	
	有効回答数	1年生	2年生	3年生	全体
	と回答率	38人	54人	45人	137人
		11.3%	19.7%	15.3%	15.2%

調査期間 1998年4月～5月
調査方法 質問紙配布回収法

学生'99 調査名 初回授業2部制についてのアンケート'99
調査対象 文教大学国際学部1～3年生 合計825名
有効回答数 1年生 2年生 3年生 全体
と回答率 165人 206人 159人 530人
72.4% 59.0% 64.9% 64.2%
調査期間 1999年4月～5月
調査方法 教室での質問紙配布回収法

教員'98 調査名 初回授業2部制についてのアンケート
調査対象 文教大学国際学部の選択科目担当教員
有効回答数 33人の教員から得られた71の授業
と回答率 対象授業の56%に相当
調査期間 1998年4月～5月
調査方法 質問紙配布回収法

教員'99 調査名 初回授業2部制についてのアンケート'99
調査対象 文教大学国際学部の選択科目担当教員
有効回答数 38人の教員から得られた74の授業
と回答率 対象授業の58%に相当
調査期間 1999年4月～5月
調査方法 質問紙配布回収法

初回授業'99 調査名 履修登録と学習状況に関するアンケート
調査対象 文教大学国際学部1～3年生 合計814名
有効回答数 1年生 2年生 3年生 全体
と回答率 167人 142人 124人 433人
72.9% 41.5% 51.0% 53.2%
調査期間 1999年11月～12月
調査方法 教室での質問紙配布回収法

文献

- (1) 岩崎重剛、石桁正士(1981)、学生のやる気の一断面、一般教育学会誌3(2),73-83
- (2) 石原静子(1996)、一般教育改革の伴う学生の授業好嫌度の変化、一般教育学会誌18(2),71-74